



夏見廃寺跡で「第3回ひめみこ春祭り」

ひめみこの舞に彩りを
手づくりで感じる表現の楽しさ

4月4日、名張中央公園では、桜まつりのメインのイベントが行われ、キッチンカーや多くの出店などで賑わった。公園の一角にある夏見廃寺跡(国史跡)では恒例の「ひめみこ春祭り」が行われ、今年は子どもたちによる、新しい「ひめみこの舞」が披露された。

名張市中央公園にある夏見廃寺は、伊勢神宮初代齋王の大來皇女(おおくのひめみこ)以下ひめみこが父天武天皇と、悲運の刑死を遂げた弟の大津皇子を祀るため8世紀に建立した昌福寺とされている。そのひめみこを顕彰し、夏見廃寺の意義を市民にもっとアピールしようとして結成されたのが、「隠(なばり)夏見ひめぼたるプロジェクト(名谷快子(なやよいこ・66)代表)」。従来から1000個近くの小さなLEDライトで廃寺跡を幻想的にライトアップする活動等をしてきた。



ひめみこ達に舞を熱心に指導する岡さん

歴史や文化を子どもたちとつなぐ

名谷さんは「ひめみこの素晴らしい事績を、市民の皆さんにもっと知ってもらうためにはどうすれば良いか、それも次代を担う子ども達と共に一緒に出来ることがあれば良いのにと、ずっと考えてきた」。昨年、東京の一流芸能事務所でマネージメントやプロデューサーをしていたが、家庭の事情で名張に帰ってきた大橋渡さん(52)にタイミング良く会うことが出来、その縁で伊勢神宮雅楽部副楽長であった岡茂男さん(五音会主宰、芸術監督・75)に夏見廃寺の現地で相談することになった。

ひめみこの舞の誕生

岡さんは廃寺跡に立って「素晴らしい場所だ!天武天皇、初代の齋王。ここで雅楽演奏と古代の舞、そして、ひめみこの万葉歌を歌おう」と、直ぐに作舞と、日本古来の神楽(かぐら)音会の作曲に取りかかった。大橋さんはプロデューサーとして、世界初の古代の舞の成功を期して、

練習開始

出演希望者のオーディションを行い、7月に小学1年生〜高校3年生まで15人の「ひめぼたる」が決まった。「ひめ」なので、何れも女の子ばかり。名張に帰ってきた大橋さんは「街を育てるには人を育てるしかない。技術・伝統・文化・そして思いの継承の中に舞姫の継承を位置づけ、次の世代を育てたい。」と始めた。

7月から箕輪市民センター等で月1〜2回練習を重ねた。始めてみると、日頃JポップやKポップを身近に楽しんでいる子ども達には、古代のゆっくりとした動きと音階に、慣れるのも覚えるのも大変だったようだ。しかし誰も嫌がるどころか、日増しに真剣に前向きに取り組んだ。

いよいよ本番

あいにく天気予報は雨。今にも降りだしそうな雲行きだった。「始めましょう」と落ちていた掛声が繰り返され、ひめぼたる達が入場した。3部形式になっている、1部は3人のひめぼたるによる清めの鈴の舞。2部は「序の舞」を5人のひめぼたる達が舞った後、大來皇女の万葉歌「磯の上に生うる馬酔木を手折らねど見すべき君があると云わなくに」を古代を偲ぶようにゆったりと詠んだ。3部は8人のひめぼたるによる「ひめみこの舞」。その間、5人の大人の楽人が岡さん作曲の「春の日、斎宮に・・・」の序文から「磯の上に・・・」を歌い、琴が合いの手のように古代の響きを奏でていた。古代の衣装は、ふわっと優雅で、肩から長く垂らした布帛(ひれ)が風にたなびき、まさに天女の羽衣のようである。「納めましょう」の声で、ひめぼたる達は優雅に退場した。それに合わせたように、雨が降り出した。